

解題 第68回大会テーマ部会B報告

「ワークショップ時代の統治と社会記述——まちづくり・ワークショップ・専門家」

Commentary on the 68th Annual Conference (Session B)

How Sociologists Face and Describe the Turning of Late Modernity:

Workshop Technologies and Experts in Community Planning

加 島 卓 ・元 森 絵 里 子

KASHIMA Takashi and MOTOMORI Eriko

1. 「ワークショップ時代の統治と社会記述」に込められたもの

(1) 出発点としての現代史の困難

関東社会学会2019～2020年度研究委員会テーマBでは、「ワークショップ時代の統治と社会記述」という通期テーマを掲げている。このいささか突飛なタイトルの背後にあるのは、社会学者がそれぞれの研究領域で、現代的な現象を捉えようとしたり変容を描こうとしたりしたときに、既存の記述の形式が失効しているのではないかという直観的な問題意識である。

本企画の出発点には、歴史社会的な関心から、現代史（現代の社会変容）をどのように描くかという問いがある⁽¹⁾。担当研究委員（加島卓、仁平典宏、牧野智和、元森絵里子）は、1990年代半ばから2000年代半ばに大学・大学院時代を過ごした世代にあたる。すでに冷戦は終結し、ギデンズ『近代とはいかなる時代か』も古典となりつつあったが、「近代」とはこういう時代で、今はその先の「〇〇化社会」を迎えているといった（今思えば紋切り型の）説明を⁽²⁾、ぎりぎりわかった気になれた最後の世代のようにも思われる。世間的にも、国家権力-住民自治、専門家支配-市民参画、教育-遊び、労働-余暇のように、「近代」を語る諸価値に「新しい価値」を対置する対抗図式も未だ定番だった。

一方、「ポストモダン」や「ニューアカ」と呼ばれた現代思想の空気も残っており、歴史社会学や言説分析が流行し、「常識」の歴史性や構築性を明らかにしていった空気の残り香が漂っていた。その尻尾に食いついて、近代社会と同義にも見えたそれぞれの領域の「常識」の歴史と現在を描こうと、フーコーなどを問い直しながら格闘するのが、ありがちな院生の姿だった。ただ、こうした試行錯誤は、ともすると「近代」に「新しい価値」を対置する「近代の揺らぎ」や「ポスト近代」などの紋切り型の図式とも親和性がある。大きな物語を問い直したかに見えて、図式的にまとめた誘惑と、事例の固有性に寄り添って見えてくる図式に乗らない現実とを行き来しながら、研究を進めてくることになった⁽³⁾。

そうこうしているうちに、気がつけば、「新しい価値」であったはずの「自治」や「参画」は政策側が掲げる価値となった。驚きをもって記述されていたはずの生のモードが自明のものとして定着し、「〇〇化社会」という説明の仕方自体が陳腐化した。マクロな社会記述への関心も後退気味となり、社会学の一部は格差社会批判や新自由主義批判へと傾斜し

ていった。近代の「常識」を問い直すことや、住民自治や市民参画を「新しい価値」として掲げることが、コストカットと自己責任を旨とする新自由主義（ネオリベリズム）の統治を下支えしてしまう可能性も、反省的に指摘されるようになった⁽⁴⁾。

しかし、新自由主義批判は批判のレトリックとしてリアリティを持つ一方、旧来の左右の対立図式を反復するかのような理解にもなりがちで、目の前の現実を捉え損なっていないだろうか。むしろ、極端に二項対立化されたインターネット上の論争と共振してしまう傾向すらあるようにも見える⁽⁵⁾。

こうした現象を社会学者はどのように捉えればよいだろうか。この時代のポイントはどこにあり、その何を指摘したら、その領域の現在に至る変容を描いたことになるのか。その際、どのような理論と方法を用いればよく、社会学者のポジショナリティはどこにあるのか。こういった感覚を、連辞符社会学会ではない関東社会学会で領域横断的に共有し、現代の社会学的記述の視角についての議論を活発化したいというのが、本テーマの狙いである。

(2)「ワークショップ時代」「統治」「社会記述」

本企画で「ワークショップ」という言葉に注目したのは、相応の理由がある。分野によってややずれがあるものの、1970～80年代ごろに「近代の曲がり角」を迎えると、様々な領域で既存の社会制度や権力構造に限界が指摘されるようになった。行政や専門家が人びとの多様なニーズに対応できないと認識され、地域住民や市民ボランティアを積極的に活用したワークショップなどの取り組みが対抗文化的な実践として称揚されるようになった。

ところが、そうした「下から」の実践はじわじわと制度化され、2000年代にはさまざまなワークショップが実施されるようになった〔中野 2001；加藤 2018〕。行政はもちろん、都市計画や文化振興に関わる専門家にも、従来のように「上から」ではなく、より多くの人びとが意志決定プロセスに参加できる機会を設け、その場を円滑に運営するファシリテーターやコンサルタントとしてのふるまいが求められている。

このような、「パートナーシップ（協働）」や「参加」を強調する趨勢を「新自由主義」と解釈し、動員批判を行う記述も一時期は多く見られた。しかし、ここまで自明の景色となり、時代の条件になったようにも見えるこの現象を、結局「上から」の動員だと批判するだけで十分なのだろうか。まちづくりから学校の授業まで、ワークショップ（参加型の意志決定や実践）が乱立する現代を、単純に「下から」の新しい運動だと称揚するのはおろか、そこに「上から」の統治が及んでいると批判することでも見えてこない、誰が何をどのように主導しているのか特定し難い現象に、社会学者はどのように挑めばいいのだろうか。

「ワークショップ時代」というやや唐突なタイトルは、この現象を捉えるために仮置きした感受概念である。行政やコンサルタント、ファシリテーターや地域住民も、1アクターとして知を持ち寄り、社会の様々な意志決定を行うようにふるまうことが求められる現代の姿を明らかにしていくための、とっかかりである。上から／下からという図式では見がたい現象は各分野で観察されるため、ワークショップというあまりに具体的な言葉を選んだ功罪はあったと考えている。

「統治」という言葉に注目したのは、これがワークショップを実施する側（上から）と

参加する側（下から）の双方を考える際のキーワードになると考えたからである。統治は国家や自治体による秩序形成を意味するだけでなく、人びとに求められている「ふるまい」や「ふるまいの導き」のメカニズムに接近するための感受概念である [Rose 1989=2016] [Foucault 2004=2007]。このようにワークショップに関わる諸アクターの「ふるまい」を考える手がかりとして、統治という言葉に注目することにした。こちらも、統治主体を強く想定させる分野とそうでもない分野があり、功罪相まみえる単語かもしれない。

では、ワークショップ時代の統治、つまり参加型の意志決定や実践が乱立する現代の人々のふるまいの諸相について、何をどのように指摘したら、現在に至る変容を社会学的に記述したことになるのか。こうした「社会記述」への関心を多様な分野の研究者で共有する場をつくりたいというのが、企画側の願望であった。ミーティングを重ねる過程で、1970～80年代とも2000年前後とも異なる「現代」の特徴があるという感覚が共有されると同時に、分野や研究者によって「記述」という言葉に多様なレイヤーが含まれていることも見えてきた。

2. 2020年研究例会「ワークとアートの現場から」

新型コロナウイルスの影響により2020年3月から8月に延期された研究例会は「ワークとアートの現場から」と題し、オンラインで開催した。松下慶太氏（関西大学）の報告「ワークショップにおける『スタイル共同体』の形成」と、高橋かおり氏（立教大学）の報告「芸術を通じた場の構築——地域に対する現代美術とクラシック音楽の試みを比較して」をもとに、ワークショップ時代の統治にはどのようなものかや、それを社会学的に記述する際の困難などを参加者全員で共有することにした。

「ワークショップ」や「地域アート」は、労働や芸術といった従来の正統性が揺らぐなかで現れた実践である。そこではフレキシブルな労働者、社会の課題に注目した表現者、地域住民、市民ボランティア、行政、ファシリテーターなど多様なアクターの多様な思いが複雑に絡み合う。こうした現象を社会学的に記述しようとする、どうしても「近代／対抗」や「参加／動員」といった図式では捉えきれない難しさが生じる。

ここで注目されるのは、社会学者を含まいかなる専門家も、実践に関わるアクターの一部になっている点である。そのため、対象から距離をとった地点に立つのは難しく、社会学者の分析は別分野の専門家による提言や行政の報告書と何が違うのかが論点になってくる。こうした現状を前に「近代／新しい価値（脱近代）」式の説明図式が繰り返されることそれ自体への反省性をどう記述に埋め込むか、分野横断的な趨勢と主題ごとの固有性をいかに記述に織り込むか、また説明において新自由主義という概念を捨て去ることができるのかといった論点や、フーコーの統治性論やアクターネットワーク理論、エスノメソドロジーといった社会（科）学的な記述の道具立ての可能性について、議論を交わした。

あえてワークショップスタイルで開催した研究例会で見えてきたのは、「記述」をめぐるいくつかのレイヤーである。ワークショップ時代において、社会学者はかつてのように「上から」と「下から」を二項対立的に捉え、前者から後者への移行を「外から」俯瞰して記述する態度をとれない。そうなったとき、1アクターでもある社会学者には、【1】 実践を「内から」どのように記述するのかという問題と、【2】 既存の図式に回収されない記述はいかに可能なのかという問題が生じる。言い換えれば、現象の複雑さをいかに単純化せずに記述するかをめぐって、【1】 社会学者のポジショナリティと 【2】 社会学的な視角

のオリジナリティの問題が、同時に問われる構図になっている。

さらに、こうした時代の特徴は何かという論点に膨らませようとする、社会学者も1アクターとして複雑な現象に巻き込まれ時代変化や全体社会の特徴を「〇〇化社会」のように図式的には描けないなかで、では【3】現代や社会の特徴を記述するとはいかなる作業なのかという抽象的な問題が生じてくる。研究例会で共有されたのは、ワークショップ時代の統治を目の前のした「社会記述」をめぐる困難と、その複数のレイヤーであるように思われた。

3. 大会時テーマ部会「まちづくり・ワークショップ・専門家」——特集論文解題

(1) 社会学者のポジショナリティと社会学的視角のオリジナリティ

新型コロナウイルスの影響により2020年6月から12月に延期された大会テーマ部会は「まちづくり・ワークショップ・専門家」と題し、オンラインで開催した。研究例会での議論を一歩進めるため、「まちづくり」という共通テーマを設定してワークショップ時代の統治と社会記述について考える機会を設けた。本特集の各論文は、そのときの議論をまとめ直したものである。

研究委員でもある牧野智和氏（大妻女子大学）の論文『『自分ごと』と『織り込み』のデザイン——まちづくりワークショップの今日的展開から』は、コミュニティデザインやソーシャルデザインなどワークショップ的なものを取り込んだ参加型まちづくりにおける技法に注目し、その変遷を解釈したものである。なかでもコミュニティデザインにおいてプロジェクトを「自分ごと」にしてふるまう（ように仕掛ける）ことが要請されている点、またソーシャルデザインにおいてはその「自分ごと」が「デザイン思考」と結びつき、プロジェクトにおける失敗や実践への批判すら問題解決の手がかりとして「織り込まれ」ていく点に注意が向けられている。その結果、ワークショップ的なものは独特な反省性（リフレクション）を備えた前進運動となり、「外から」や「上から」の記述が難しくなるという。

植田剛史氏（愛知大学）の論文「プロジェクト型開発の時代における都市計画コンサルタントの専門知——都市を作りかえる実務者からの社会学的都市記述に向けて」は、まちづくりワークショップの仕切り役に見える都市計画コンサルタントに注目し、その業務内容と役割の歴史の変遷を整理したうえで、その都市記述と社会学者による都市記述の関係を検討したものである。都市計画の専門家の業務内容が、行政と民間開発者のあいだの調整から住民を含む多様な利害関係者のあいだの調整（コーディネーターやファシリテーター）に変わり、こうしたふるまいの変化（業務のソフト化）が、都市計画コンサルタントの「役割の再定義」や新たな「専門性の確立」を促した点に注意が向けられている。この新たな専門性を分析する概念として、植田氏は「対話型専門知」[Collins and Evans 2007]に注目する。またこの対話型専門知を生かした「報告書」などが求められる現状では、社会学者による都市記述よりコンサルタントの都市記述のほうが「高い解像度」かもしれないことが指摘される。

五十嵐泰正氏（筑波大学）・安東量子氏（NPO法人福島ダイアログ）の論文「専門知と地域の人々のあいだで——放射線リスクコミュニケーションの経験から」は、福島原発事故の後に各地で行われた話し合いの場にそれぞれがいかに関わり、また何を考えてきたのかを整理したものである。両者が関わる「安全・安心の柏産柏消」円卓会議やNPO法人

福島ダイアログが行なっていることは、同じ地域に暮らしながらも職業や立場によって異なる感覚をすり合わせ、リスクに関わる科学的な知識を生活や地域における日常的な知識（ローカルな専門知）とすり合わせる作業であったという。両者が共有するのは、その過程における「聴く」ことの重要性である。社会学者の五十嵐氏は、一連のすり合わせを「解釈共同体の形成」と表現し、「聴く技術」は「社会学的フィールドワークにおける質的調査そのもの」と捉え直す。そして、植田論文同様の「対話型専門知」と関連づけながら、多様な人びとのニーズを引き出す社会学者の対話能力が現場の専門家チームへの応答につながる可能性を述べている。

3論文が共通して描き出すのは、現代のまちづくりの現場が、参加者（地域の人）やファシリテーター（都市計画コンサルタント）の細やかな反省性を取り込み、対話と解釈（トランスレーション）を繰り返しながら進んでいく様相である。そのなかで、社会学的な反省性が特権的なものでなくなっていることも示唆されている。ただし、それぞれの対象に対する3氏の社会学者としての関わり方は少しずつ異なっている（【1】）。そしてこうした違いが、社会学的な視角の限界と可能性をどこに見出すのかの差異にもなっている（【2】）。

ここで、植田論文や五十嵐・安東論文が言及している「対話型専門知」の議論を補助線にしてみよう。コリンズとエヴァンズによると、「対話型専門知」（interactional expertise）は「貢献型専門知」（contributory expertise）と区別される知識のあり方である。ある領域の専門家が命題的知識の獲得を目指す貢献型専門知とは別に、「意見交換の媒介」[Collins and Evans 2007: 訳38]に役立つ「言語を使いこなす能力」[同: 訳18]に注目したのが対話型専門知であり、具体的には「対話能力」と「熟慮能力」が挙げられている[同: 訳45]。

牧野論文が主として観察するのは、ワークショップという技法の変遷と同時に、そこで求められる参加者のふるまい（自己へのテクノロジー）の変遷である。対話型専門知のうちの熟慮能力がいかにワークショップのなかに織り込まれ、参加者のふるまいを水路づけているかを明らかにしていると言い換えうる。その結果、見出されるのは社会学者の反省性（熟慮能力）までもワークショップに織り込まれる現状である。そこで牧野氏は、今一度対象から距離をとり、熟慮能力の織り込みこそがワークショップそのものをバージョンアップする技法となっていることを社会学的な反省性（熟慮能力）を用いて記述する。そして、このようなワークショップの当事者に別様の解釈を提示する記述に、社会学的な視角の可能性を見ようとしている。

これに対して、五十嵐・安東論文は、意志決定型ワークショップとは異なるリスクコミュニケーションの場の技法と、そこでの参加者のふるまいを観察したものといえる。興味深いのは、その場の参加者のふるまいの鍵が、対話能力に見出される点である。そして、社会学者として以前に1参加者として内側に関わっている立場から、まさにそこにおいて、社会学が内在させる対話型専門知のうちの対話能力が貢献可能性を持つことを提示している。

社会学者のポジショナリティ（【1】）や視角のオリジナリティ（【2】）の問題に、より深刻に向き合っているのが植田論文であろう。都市変容をいかに書くかという変化の記述をめぐる問題関心（【3】）が含まれ、その視点から、都市のつくり方の変容と、都市計画コンサルタントの専門知の変容に着目するからである。その結果として、都市計画コンサルタントの専門性において、貢献型専門知から対話型専門知への移行が見出される。そもそ

も都市の物的基盤（インフラ）への専門知を持つ都市計画コンサルタントが、多様な利害関係者間の対話を調整するようになり、解像度の高い都市記述を生み出すとき、社会学者による都市記述はその足場を揺さぶられる。植田氏は、牧野氏同様、現場には極力巻き込まれないというスタンスであるにもかかわらず、この動揺に巻き込まれた中からいかにして都市変容を描いていくか、問わざるをえなくなる。そこで、現場の専門家にも対話能力が求められるなか、そのことも含めたより包括的で批判的な都市記述に社会学的な反省性（熟慮能力）の可能性を見ようとしている。

以上のような違いはあれ、3名とも、社会学が以前から織り込んできた反省性（熟慮能力、対話能力）に、改めて可能性を見出す点は共通している⁶⁾。大会テーマ部会で見えてきたのは、このような社会学者のポジショナリティの複数性と、にもかかわらずどこか通底する社会学的視角への希望ではないだろうか。

(2) 社会記述の歴史的條件

近森高明氏（慶応義塾大学）の論文「『都市』から『まち』へ——2000年代以降の都市記述の変容について」は、大会テーマ部会での3報告に対して「都市記述」という観点からコメントしたものをまとめた論考である。主として、現代のまちづくりの記述の困難を、**【1】** 社会学者のポジショナリティと **【2】** その視角のオリジナリティという論点から展開していただくこととなった3報告を整理し、**【3】** 現代や社会の特徴を記述するとはいかなる作業か、すなわち何を書いたら社会変容を描いたことになるのかという論点に向けての議論の基盤を提供していただくことを目的としている。

近森論文は、都市論や都市社会学の動向に3論文を位置づける。そして、都市論がインフラ論やアクターネットワーク理論に注目し、都市社会学がまちづくりやワークショップの営みに注目する背後に、「都市が見えなくなる」状況があり、見えない都市をどうにか「見えるもの」を捉えようとするのがこれら研究動向だと指摘する。これはいわば、図式的な俯瞰語りが失効したなかで、手掛かりがモノや意志決定形式といった手触りのあるものになりつつあるということだろう。ところがこうした視角の変更そのものが、実際の都市やまちの「つくり方」のシフト（「コントロールからマネジメントへ」）と連動しているともいう。都市がワークショップでつくられるからこそ、モノに注目するアプローチにしても、イシューを抱えた「まち」の秩序を描くにしても、実際に各所で行われるワークショップ（の書き方）について考えることが、「問いの対象としての確かさ」であるように思えてくる。こう考えると、かつて都市を全域的に語っていたこと自体が不思議に見えてくる。この意味で、近森論文は、都市やまちをテーマにした社会学的な視角のオリジナリティの条件の歴史社会学的な考察となっている。

本企画の出発点である現代史（現代の社会変容）の歴史社会学的記述という問題意識に折り返せば、このように社会学的な視角の歴史社会学的な考察を併せて行っていくことが、現代を記述するためには必要だろう。社会学者が社会の一部に巻き込まれ、それを再帰的に観察するという構図は、今に始まったものではない。その意味では、「〇〇化社会」式の議論もある時代の観察の一つにすぎないともいえる。にもかかわらず、特権的な位置から社会を俯瞰したり図式で整理したりすることが「社会学的」と見えていたとしたら、それはどのような現実のなかでのことなのか。同様に、ある時期以降、そのような立ち位置からの記述が困難になった感覚があるとしたら、それはいかなる現実のなかでのことな

のか。その先に、当該分野の専門家から見れば無力な1アクターであることに自覚的にならざるを得ない社会学者が、現在に至る時代変容を記述していく道を探れないだろうか。近森論文が示唆するのは、2年目に向けたこのような方向性である。

4. 2年目に向けて

本テーマ部会1年目は、「ワークショップ時代」と仮置きした現代社会の様相と、そこにおける社会学的記述の困難の感覚を言語化し共有することに力点を置いた。2年目は、そのような現代社会の変容の記述はどのようなものでありえるかにより力点を移して、企画を継続したい。

本特集が会員の手元に届くころには、今期委員2年目の研究例会と学会大会は終了しているのだが、2021年3月の例会では「現代史の社会学的再考」と題し、まちづくりとは別の対象領域において、対象の変容と記述の変容の関係性を改めて考えていく。具体的なモノや技術や言説の配置の変容と、典型的な記述の変容の関係に焦点をあて、それを記述する際の【1】社会学者のポジショナリティや【2】社会学的視角のオリジナリティ、何より【3】現代や社会の特徴を記述するとは、また、対象の外に立ったかにもよるまえないなかで、対象の同定や理論化とはどのような作業なのかといった点を議論する。

2021年6月の大会テーマ部会では「『新自由主義』の社会学的再構成」と題し、「新自由主義」をテーマに統治と社会記述の関係を考えていく。既に述べたように、新自由主義は「批判のレトリック」であると同時に「時代の条件」にもなっている。そこで大会テーマ部会では「新自由主義」という社会記述の複数性、行政学から見た「新自由主義」概念、そして「新自由主義」概念の使用条件の検討などを行う。これらを通して、ワークショップ時代の統治と社会記述という本企画に対する暫定的な見通しを次年度の解題で示せればと考えている。

註

- (1) 2009年の第56回関東社会学会大会テーマ部会B「社会学における歴史的資料の意味と方法」、2010年の第57回関東社会学会大会テーマ部会B「『生きられる歴史』への社会学的接近」以来である〔野上・小林 2015〕。
- (2) 社会学の命題を扱った友枝ほか〔2017〕でいえば、「情報化」「個人化」「再帰的近代化」「液状化」「グローバル化」などが、これにあたるだろう。
- (3) 社会学の文体が改めて問い直され、フーコーの方法と重なるような、「1次的データへの遡及と高度に抽象的な思考の組み合わせの組合せ」〔佐藤 1998: 89〕による研究が現れたが、そのバリエーションはさまざまである。
- (4) 参加型市民社会とネオリベラリズムの「共振」にどのようなバリエーションがあったのかは既に整理されている〔仁平 2005〕。
- (5) ネット上の極端な二項対立を解除し、複数の論点を整合的に再構成する作業が、「炎上」以後の社会学者には見られる〔五十嵐 2018〕。
- (6) 社会学と社会調査の意義を提起したフィンチは、社会学者は政策論争を照らす「イルミネーション」を提供するものだと述べている〔Finch 1986〕。上からの政策のみならず、上から・下からが同定できないような参加型の実践が、反省性の昂進を伴って展開されている現在においても、社会学は「イルミネーション」でありえるだろうか。

文献

- Collins, Harry and Evans, Robert 2007 *Rethinking Expertise*. The University of Chicago Press. =2020 奥田太郎 (監訳) 『専門知を再考する』名古屋大学出版会.
- Finch, Janet 1986 *Research and Policy: Use of Qualitative Methods in Social and Educational Research*. Falmer Press.
- Foucault, Michel 2004 *Sécurité, Territoire, Population: Cours au Collège de France. 1977-1978*, ed. Midhel Sonellart, Gallimard & Seuil. =2007 高桑和巳 (訳) 『安全・領土・人口：コレージュ・ド・フランス講義1977-1978年度』筑摩書房.
- 五十嵐泰正 2018 『原発事故と「食」：市場・コミュニケーション・差別』中央公論社.
- 加藤文俊 2018 『ワークショップをとらえなおす』ひつじ書房.
- 中野民夫 2001 『ワークショップ：新しい学びと創造の場』岩波書店.
- 野上元・小林多寿子 (編) 2015 『歴史と向きあう社会学：資料・表象・経験』ミネルヴァ書房.
- 仁平典宏 2005 「ボランティア活動とネオリベラリズムの共振問題を再考する」『社会学評論』56(2): 485-499.
- Rose, Nikolas 1989 *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self*. Routledge. =2016 堀内新之助・神代健彦 (監訳) 『魂を統治する：私的な自己の形成』以文社.
- 佐藤俊樹 1998 「近代を語る視線と文体」高坂健次・厚東洋輔 (編) 『講座社会学1：理論と方法』東京大学出版会 pp. 65-98.
- 友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留 (編) 2017 『社会学の力：最重要概念・命題集』有斐閣.

(東海大学文化社会学部 oxyfunk@gmail.com)

(明治学院大学社会学部 motomori@soc.meijigakuin.ac.jp)